

「ちばエコ農産物」栽培のために！
 (品目別栽培カード ④)



ネギ・秋冬どり栽培

(改訂版)

千葉県農林水産部

1 栽培基準

ネギ・秋冬どり栽培の栽培基準は、化学合成農薬の使用成分回数が18回以下、化学肥料使用量(窒素分量)が13kg/10a以下です。

また、堆肥は、その原料ごとに施用の目安量があります(表1)。



▲ 整然と管理された圃場

表1 ネギ・秋冬どり栽培の「ちばエコ農産物」栽培基準

(平成21年4月現在)

作型	上 限 量		堆肥目安量(kg/10a)				収穫期
	化学合成農薬使用回数 (使用成分×回数)	化学肥料使用量 (窒素分量kg/10a)	牛ふん	豚ふん	鶏ふん	土づくり 的堆肥	
秋冬どり栽培	18	13	2,300	900	500	3,000	10～3月

2

栽培基準達成のポイントと考え方

1 病虫害防除

「ちばエコ農産物」の栽培基準に適合した薬剤防除例を表2に示します。栽培基準となる化学合成農薬使用回数で防除を行うためには、黒斑病、さび病、べと病等の病害とヨトウムシ類、アブラムシ類、ネギアザミウマ等の害虫に注意します。病虫害の特徴を理解するとともにそれぞれの発生状況をよく観察し、適期防除を行うことが重要です。

病害の発生時期は、以下のとおりです。黒斑病は、5～11月頃にわたって発生し、特に梅雨期に多発します。さび病は、春と秋の低温で降雨が多い場合に多発します。べと病は、5月以降の降雨時に発生します。

表2 ネギ・秋冬どり栽培の「ちばエコ農産物」栽培基準に適合した農薬防除例

散布時期	栽培管理	農薬名	10a当たり使用量 (希釈倍数等)	対象病虫害
5月上旬 中旬 下旬	播種	ダコニール1000	500倍	苗立枯病
6月上旬 中旬 下旬	定植	ベストガード粒剤	6 kg/10a	ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ
7月上旬 中旬	土寄せ	ダイアジノン乳剤40	700～1,200倍、 1,000倍	アザミウマ類、 アブラムシ類
下旬		ジマンダイセン水和剤	600倍	べと病、さび病、黒斑病
8月上旬 中旬	追肥・土寄せ	アグロスリン乳剤 ロブラール水和剤	2,000倍 1,000～1,500倍、 500～1,000倍	アザミウマ類、アブラムシ類 黒斑病、 白絹病
下旬		ダントツ粒剤	3～6 kg/10a	ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ
9月上旬 中旬	土寄せ	ダイアジノン乳剤40	700～1,200倍、 1,000倍	アザミウマ類、 アブラムシ類
下旬		ダコニール1000 ※スピノエース顆粒水和剤	1,000倍 5,000倍	べと病、黒斑病 シロイチモジヨトウ
10月上旬 中旬	追肥・土寄せ	アグロスリン乳剤 ストロビーフロアブル	2,000倍 2,000倍	アザミウマ類、アブラムシ類 さび病、黒斑病
下旬		アフーム乳剤	1,000～2,000倍	シロイチモジヨトウ
11月上旬 中旬	土寄せ	オンコルマイクログカプセル	1,000～2,000倍	ネギアザミウマ
下旬		アグロスリン乳剤 ジマンダイセン水和剤	2,000倍 600倍	アザミウマ類、アブラムシ類 べと病、さび病、黒斑病
12月上旬 中旬 下旬		ダントツ粒剤	3～6 kg/10a	ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ
1月上旬 中旬 下旬	追肥・土寄せ			
2月上旬 中旬 下旬	収穫			

注) 栽培基準の上限回数まではあと2剤使用できるので、病虫害が多発した場合、「2栽培基準達成のポイントと考え方」の「病虫害防除」を参考に、農薬散布を行う。

※印は、「ちばエコ農産物」における化学合成農薬に含めない農薬

害虫の発生時期は、ネキリムシ類は5～6月、ヨトウムシ類は9～11月、アブラムシ類は6～7月及び10～11月、ネギアザミウマは6～10月です。

各害虫に対する薬剤は、シロイチモジヨトウには、アフーム乳剤、トレボン乳剤等、アブラムシ類には、ダイアジノン乳剤40、アグロスリン乳剤、スミチオン乳剤等、ネギアザミウマには、ダントツ粒剤、ダイアジノン乳剤40、オンコルマイクロカプセル等が有効です。

A ネギの生育時期別の病害虫の発生

●定植期 [観察による病害虫発生の把握と農薬の適正散布を心がけます]

ネギアザミウマやネギハモグリバエの予防には、ベストガード粒剤を移植時の植溝に土壌混和すると防除効果が高く、1か月程度の効果持続が期待できます。シロイチモジヨトウの発生がみられたら、アフーム乳剤、トレボン乳剤を散布して防除します。

●追肥～収穫時期 [殺菌剤は予防的な散布を心がけます]

アブラムシ類及びネギアザミウマの発生に気をつけ、発生を確認したら、ダイアジノン乳剤40やアグロスリン乳剤を使用します。ネギアザミウマにはオンコルマイクロカプセルが効果的ですが、使用回数が1回に制限されていますので、使用時期に留意してください。また、梅雨期には特に病害の発生に気をつけ、この時期の病害に対しては、予防的な散布が必要となります。



▲ ひっぱり君による定植

B ネギ・秋冬どり栽培における農薬の考え方

●殺虫剤は、観察に基づき、発生に応じた散布を心がけます

殺虫剤は害虫の初期発生を確認してから散布するという手法をとれば、過剰な使用を防ぐことができます。また、薬剤は株全体にしっかりと丁寧に散布することが大切です。

●殺菌剤は予防的な散布が効果的です

病害は、低密度でも発生していると、天候次第では致命的な被害をもたらすこともあるため、予防的に散布します。

●「化学合成農薬に含めない農薬」を有効に活用します

次の薬剤は、「ちばエコ農産物」栽培基準における「化学合成農薬に含めない農薬」なので、有効に使用します。

さび病：イオウフロアブル(500倍)

黒斑病：ポリオキシシンAL水和剤(1,000倍)

軟腐病：Zボルドー(500倍)

シロイチモジヨトウ：スピノエース顆粒水和剤(5,000倍)

フローバックDF(BT剤)

ヨトウコン-S(フェロモン剤)

●農薬の使用に当たっては、各剤の収穫前使用日数を遵守します

2 施肥（堆肥と有機質肥料の施用）

施肥事例を表3に示します。基肥窒素は、有機質肥料（菜種油かす）で代替しました。りん酸の成分は、熔りん等を用いて20kg/10a、加里の成分は、硫酸加里等を用いて15kg/10aとなるように施用しました。追肥窒素は、燐硝安加里 S552を用いました。堆肥は、牛ふんを10a当たり2トン施用しました。施肥量は、各圃場ごとに土壌診断に基づいて決めることをお勧めします。

表3 ネギ・秋冬どり栽培の「ちばエコ農産物」栽培基準に適合した堆肥及び肥料の施用例

区分	製品名	保証成分量(%)			現物施用量 (kg/10a)	成分施用量(kg/10a)		
		窒素	りん酸	加里		窒素	りん酸	加里
堆肥	牛ふん堆肥				2,000			
基肥	菜種油かす	5(0)	2	1	240	12(0)	4.8	2.4
	熔りん		20		76		15.2	
	硫酸加里			50	25.2			12.6
追肥	燐硝安加里 S552	15(15)	15	12	80	12(12)	12	9.6
総施用量						24(12)	32	24.6

注) () 内は、総窒素量のうち、化学肥料由来の窒素成分量

☆この「品目別栽培カード」に記載した農薬・肥料使用例は、平成18年度現地実証試験時点のものです。実際の農薬使用に際しては、ラベルの表示をよく確認するとともに、最新の農薬使用基準を守って使用してください。
なお、栽培基準は平成20年4月改訂後のものを記載しています。

●著 作 千葉県農林水産部担い手支援課
千葉県農林総合研究センター
●編集・発行 千葉県農林水産部安全農業推進課
●発行年月日 平成19年3月(平成22年3月改訂)
■内容についての問い合わせ先
千葉県農林総合研究センター
TEL, 043(291)9987